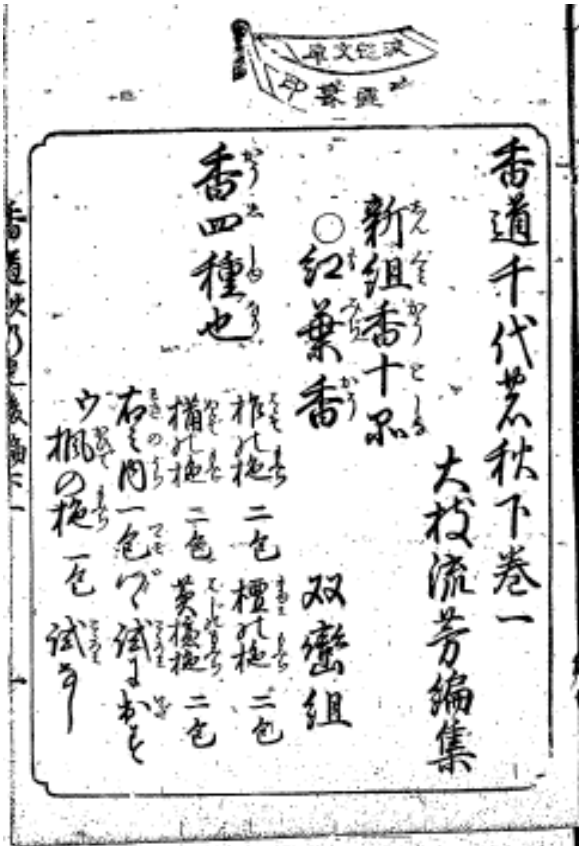


香道千代農秋下巻一

大枝流芳編集

新組香十品

○紅葉香（もみじこう）　双巒組

香四種也

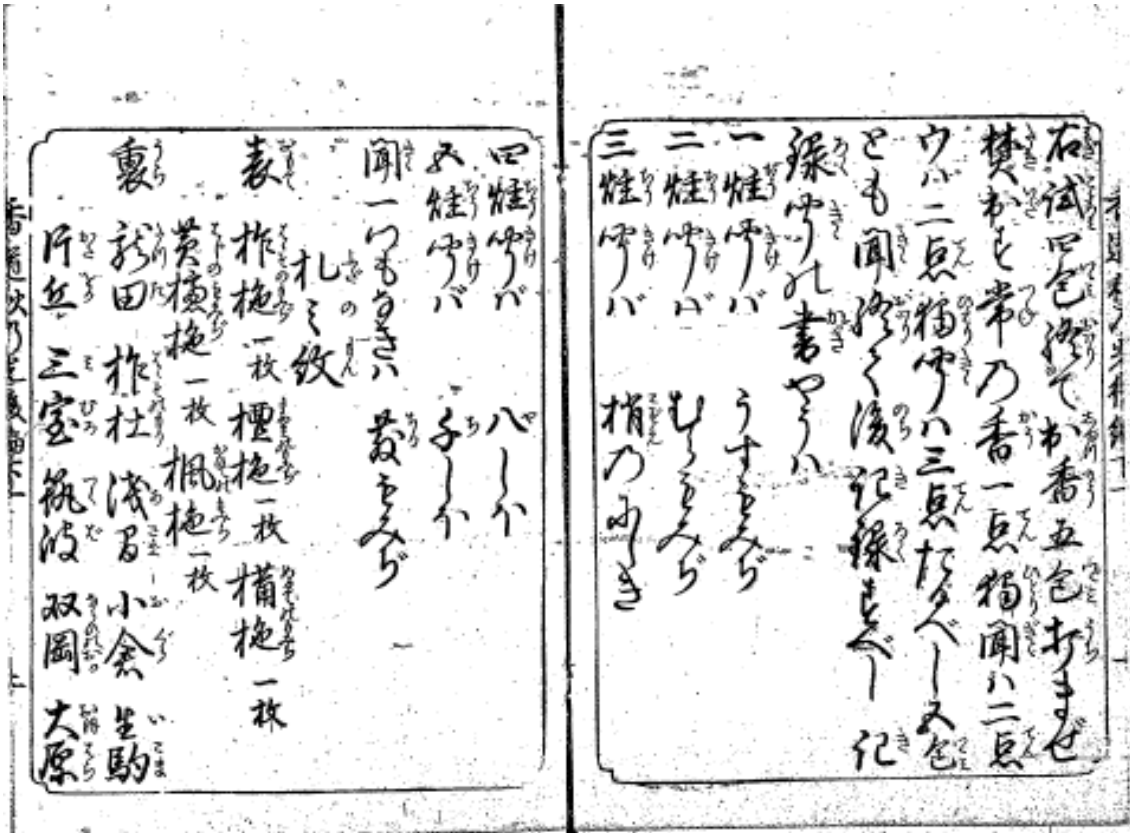
「柞の柶」二包　「檀の柶」二包

「拷の柶」二包　「黄櫨の柶」二包

右の内一包ずつ試みに出す。

ウ「楓の紅葉」一包　試みなし

※「拷」はフォントがないために略して表記。



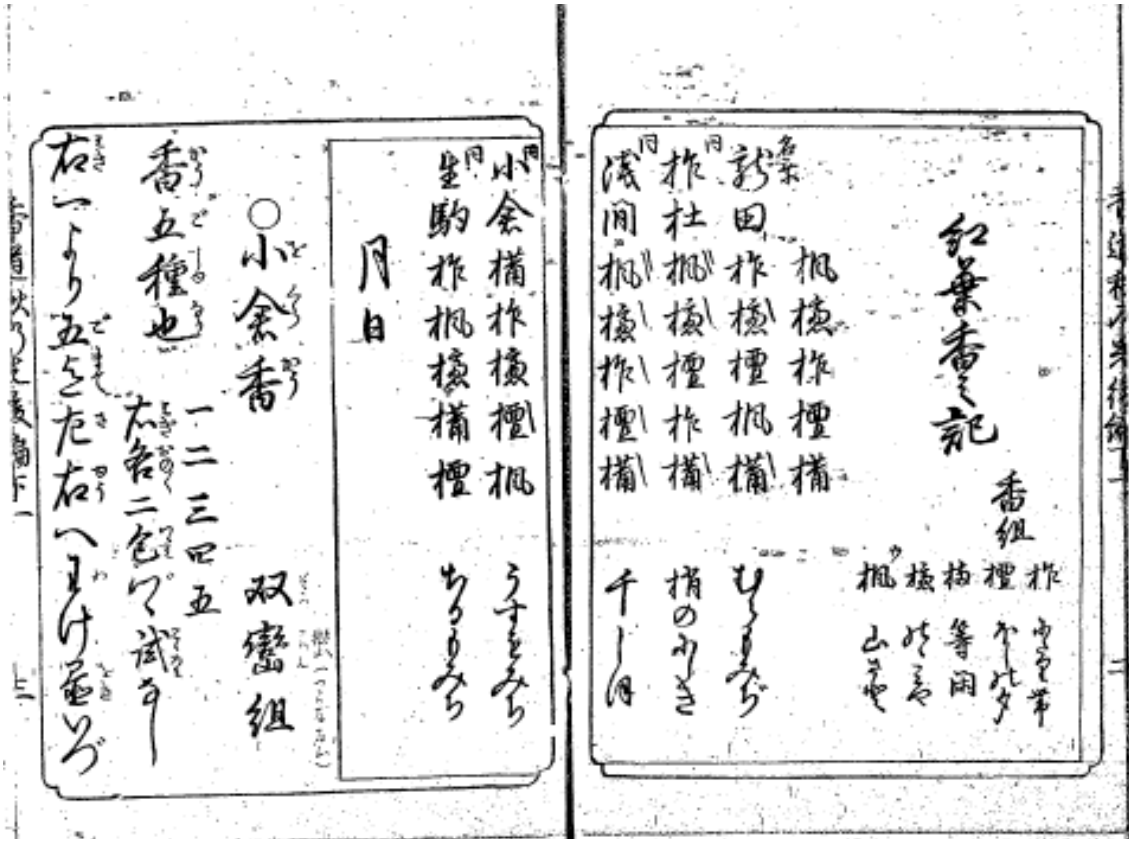
右試み四包終りて、出香五包打ちまぜ
焚き出す。常の香一点、独聞は二点
ウは二点、独聞は三点たるべし。五包
とも聞き終りて後、記録すべし。記
録、聞の書きようは

一炷聞けば「うすもみじ」
二炷聞けば「むらもみじ」
三炷聞けば「梢のにしき」

四炷聞けば「八しほ(やしお)」
五炷聞けば「千しほ(ちしお)」
聞き一つもなきは「散もみじ」

札の紋

表「柞桧(ははそのもみじ)」一枚
「檀桧(まゆみのもみじ)」一枚
「栲桧(ぬるでのもみじ)」一枚
「黄櫨桧(はじ(ぜ)のもみじ)」一枚
「楓桧(かえでのもみじ)」一枚
裏「龍田」「柞杜(ははそのもり)」「浅間」「小倉」「生駒」
「片丘」「三室」「筑波」「双岡(ならびのおか)」「大原」



［紅葉香之記］

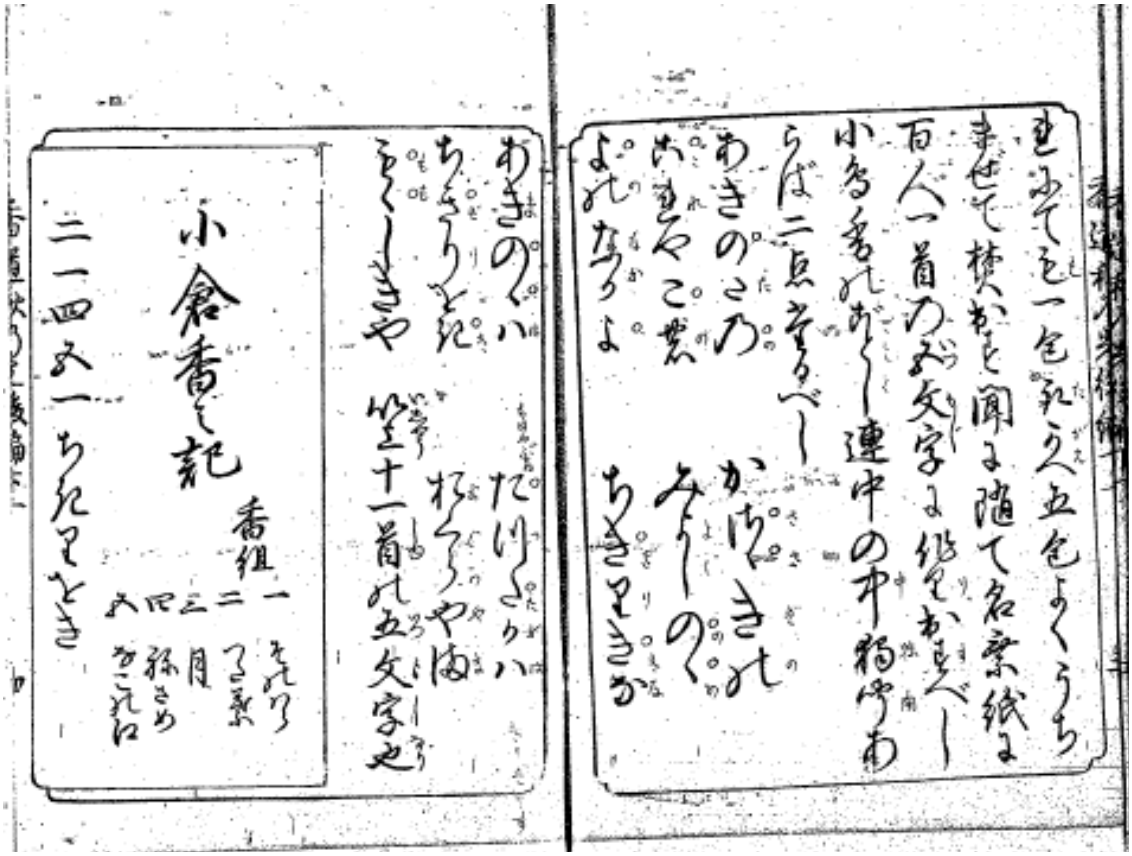
○小倉香（おぐらこう）　双巒組

香五種也

「一」「二」「三」「四」「五」

右各々二包ずつ試みなし。

右、「一」より「五」まで左右へわけ置き、いず

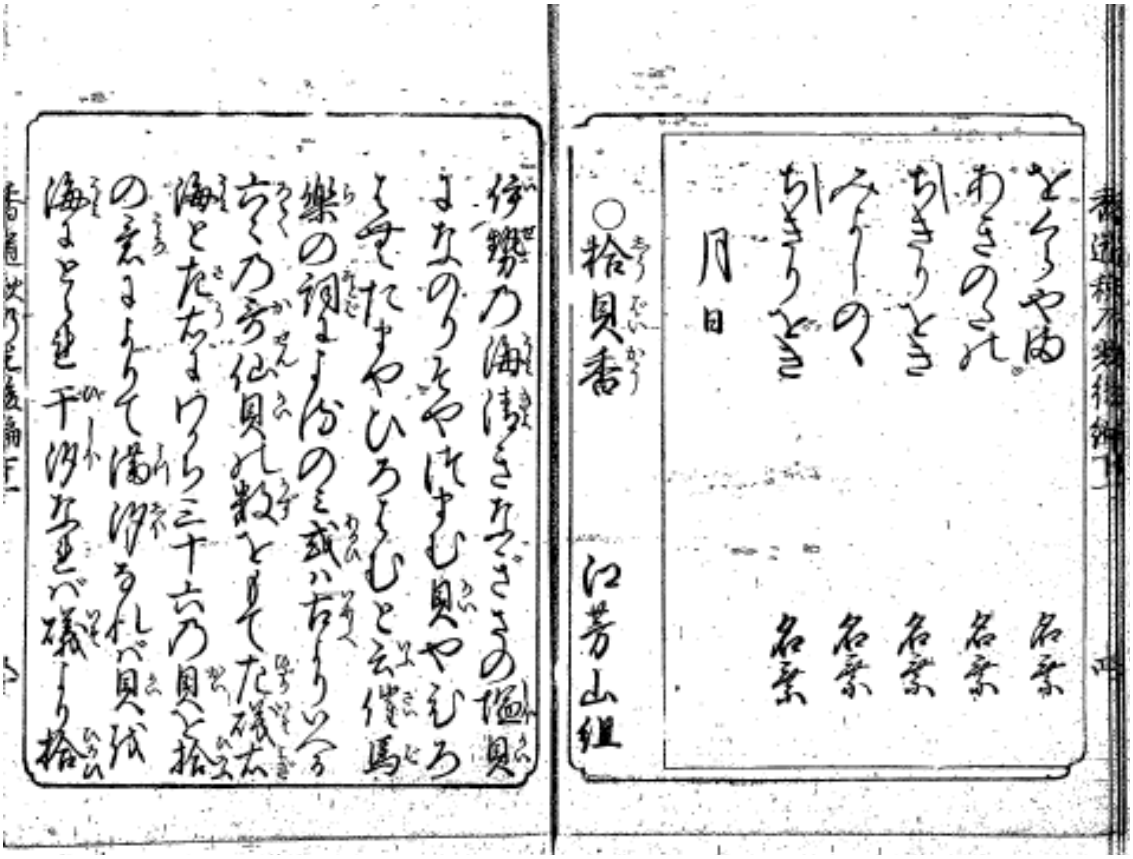


れにても一包取りかえ、五包よくうち
まぜて焚き出す。聞きに随いて名乗紙に
『百人一首』の五文字に作り出すべし。
「小鳥香」のごとく連中の中、独聞あ
らば二点たるべし。

あきのたの　かささぎの
これやこの　みよしのの
よのなかよ　ちぎりきな

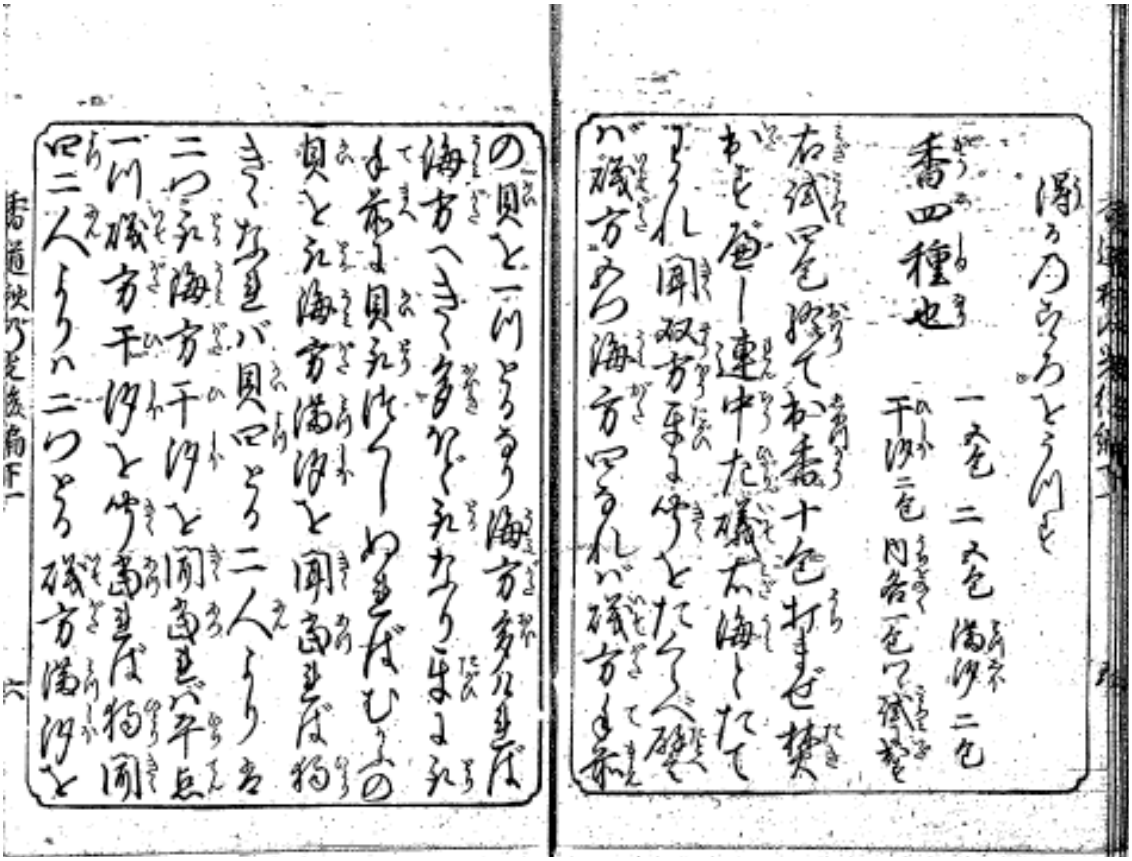
あきののは　たつたがは
ちぎりをき　おぐらやま
ももしきや　以上、十一首の五文字也

［小倉香之記］



○拾貝香（しゅうばいこう）　江芳山組

「伊勢の海清きなぎさの塩貝
になのりそ（神馬藻）やつまむ貝やひろ
わむ。たまやひろわん」と云う。催馬
楽の詞によるのみ。或は古えよりいえる
六々の歌仙、貝の数をもて「左磯」「右
海」と左右にわかち三十六の貝を拾う
の意によりて、満汐（みつしお）なれば貝を
海にとらせ、干汐（ひしお）なれば磯より拾い



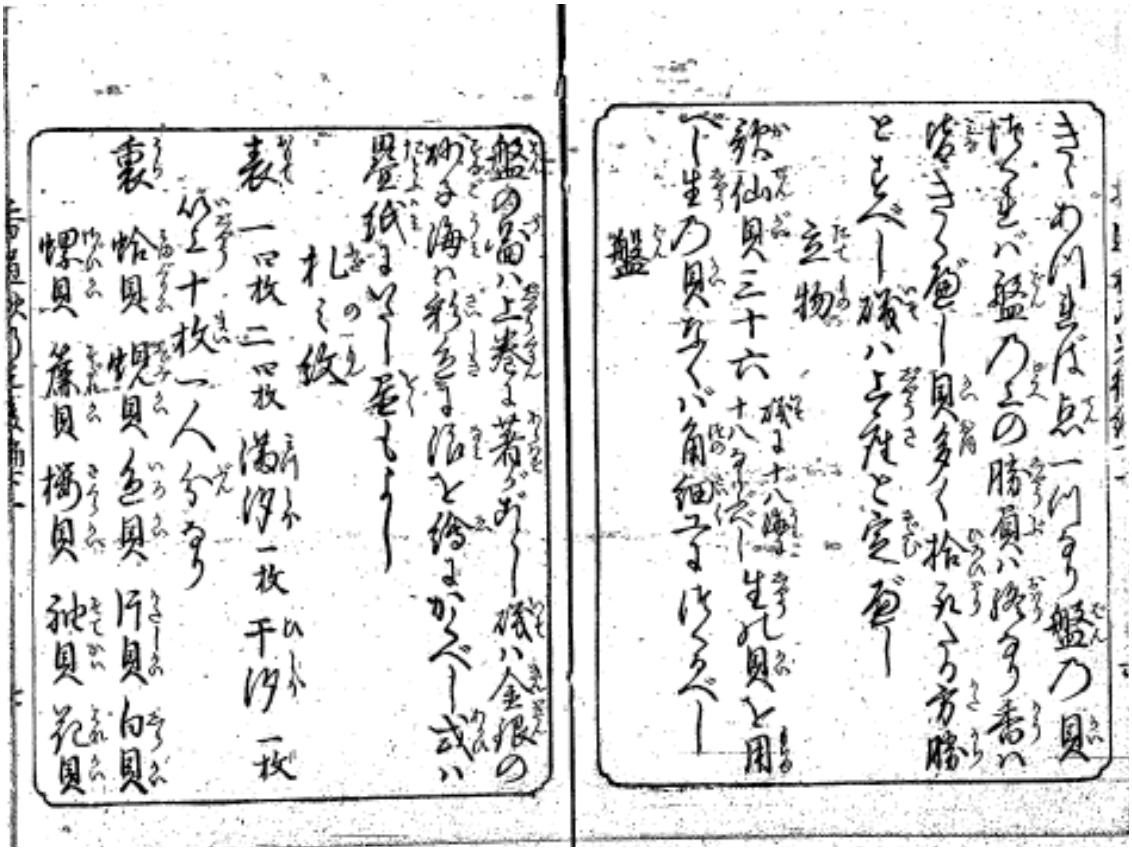
得るのこころをうつす。

香四種也

「一」五包　「二」五包　「満汐」二包
「干汐」二包　内各々一包ずつ試みに出す。

右試み四包終りて、出香十包打ちまぜ焚き
出すべし。連中、左「磯」、右「海」とたて
わかれ聞く。双方互いに聞くをたくらべ、譬(たとえ)
ば、「磯方」五つ、「海方」四なれば、手前

の貝を一つとるなり。「海方」多ければ
「海方」へきき多きほど取るなり。互いに取り
手前に貝取りつくしぬれば、むこうの
貝を取る。「海方」、「満汐(みつしお)」を聞き当つれば独
ききなれば、貝を四つとる。二人よりは
二つ取る。「海方」、「干汐(ひしお)」を聞き当つれば平点
一つ、「磯方」、「干汐」を聞き当つれば独聞
四つ、二人よりは二つとる。「磯方」、「満汐」を



ききあつれば点一つなり。盤の貝つく(尽)れば、「盤の上の勝負」は終りなり。香は皆きくべし。貝多く拾いとりたる方、「勝」とすべし。「磯(方)」は上座と定むべし。

立物

「歌仙貝」三十六（磯に十八、海に十八ならぶべし。）「生の貝」(本物の貝)を用ゆべし。生の貝なくば角細工につくるべし。

盤

盤の図は上巻に著すがごとし。「磯」は、金銀の砂子。「海」は、彩色に波を絵に書くべし。或は畳紙にいたし置くもよし。

札の紋

表「一」四枚　「二」四枚　「満汐」一枚　「干汐」一枚

以上十枚一人分なり。

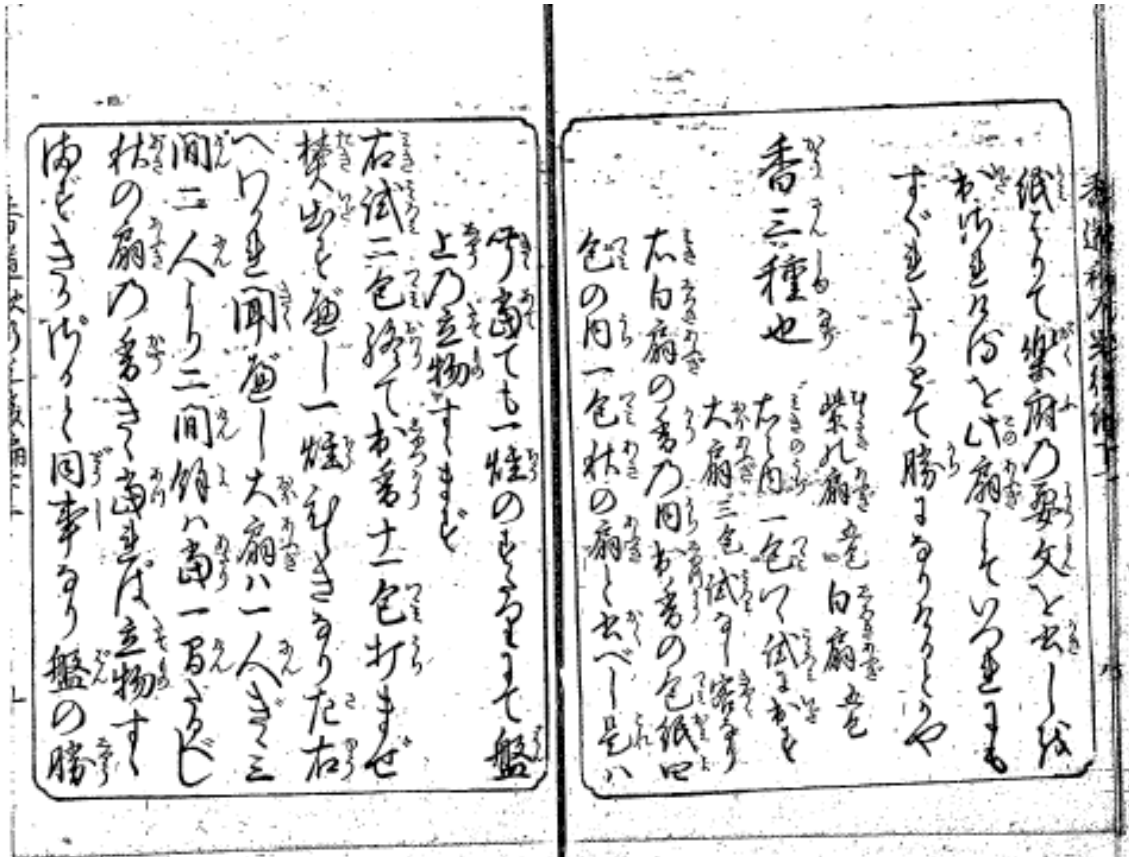
裏「蛤貝」「蜆(しじみ)貝」「色貝」「片(かたし)貝」「白貝」「螺(さざひ)貝」「簾(すだれ)貝」「桜貝」「袖貝」「花貝」

［拾貝香之記］

○扇合香（おうぎあわせこう）　流芳組

『著聞集』に「扇合」の大内（おおうち＝内裏）にありし
事をのせて、行成卿（こうぜいきよう＝藤原行成）黒骨に黄なる

※『古今著聞集』巻八「能筆」二九二段



紙はりて楽府の要文（ようもん）を書きしを
出されけるを此の扇こそいずれにも
すぐれたりとて「勝」になりけるとや。

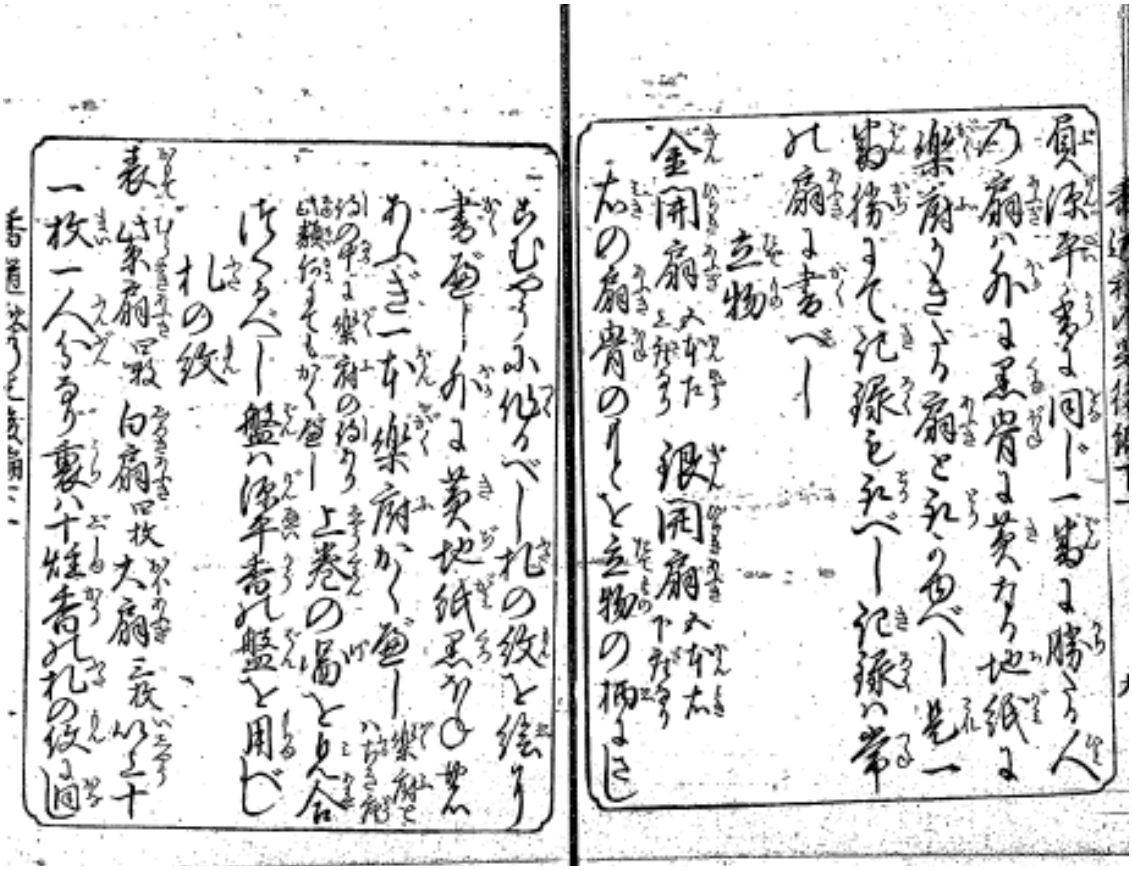
香三種也

「紫の扇」五包　「白き扇」五包
右の内一包ずつ　試みに出す。
「大扇」三包　試みなし。客なり。

右「白扇」の香の内、出香の包紙四
包の内一包、「秋の扇」と書くべし。是は

聞き当てても一炷のすたりにて盤
上の立物すすまず。

右試み二包終りて、出香十一包打ちまぜ
焚き出すべし。一炷ひらきなり。左右
へわかれ聞くべし。大扇は一人ぎき三
間、二人より二間、餘は当り一間たるべし。
秋の扇の香ぎき当つれば、立物すす
まず、聞かざると同事（どうじ）なり。盤の勝



負、「源平香」に同じ。一番に勝ちたる人
の扇は、ほかに「黒骨に黄なる地紙に
楽府かきたる扇」を取りかゆべし。是、「一
番勝」にて記録も取るべし。記録は常
の扇に書くべし。

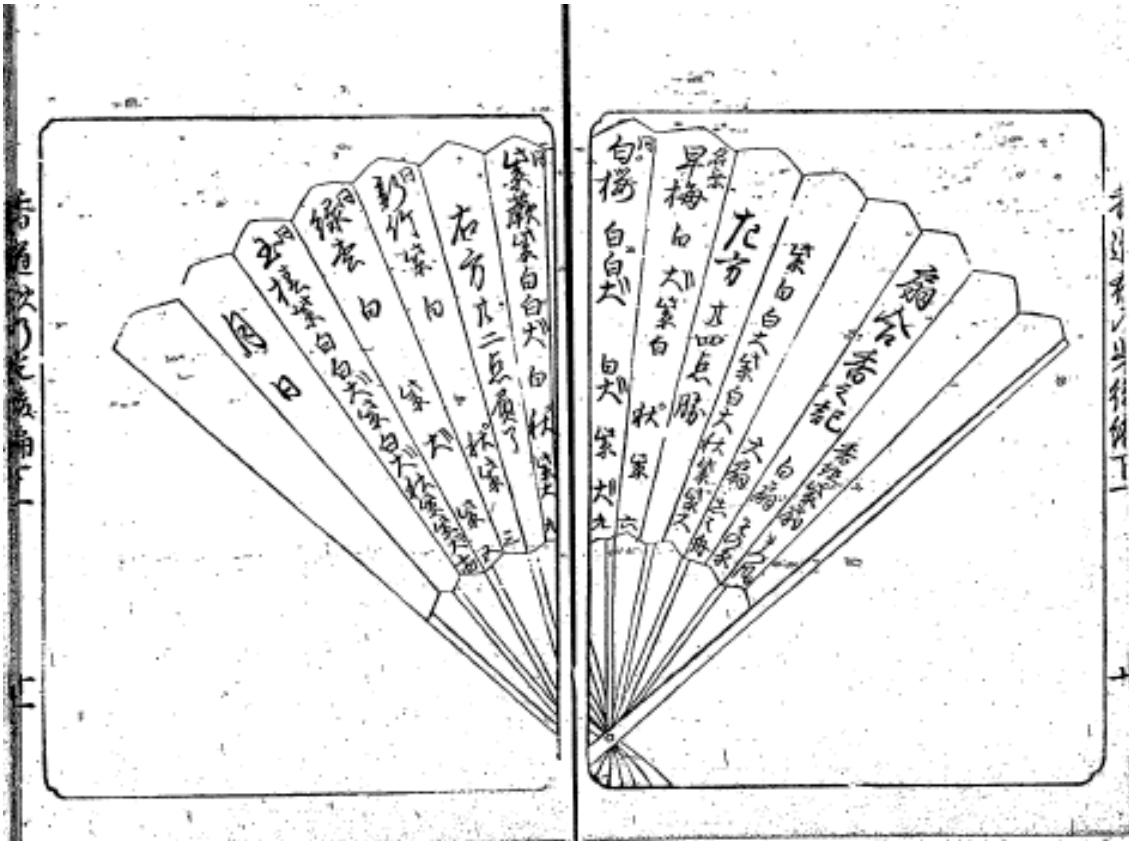
立物

金開扇（きんひらきおうぎ）五本、左上座なり。
銀開扇（ぎんひらきおうぎ）五本、右下座なり。
右の扇、骨のもとを立物の柄にさし

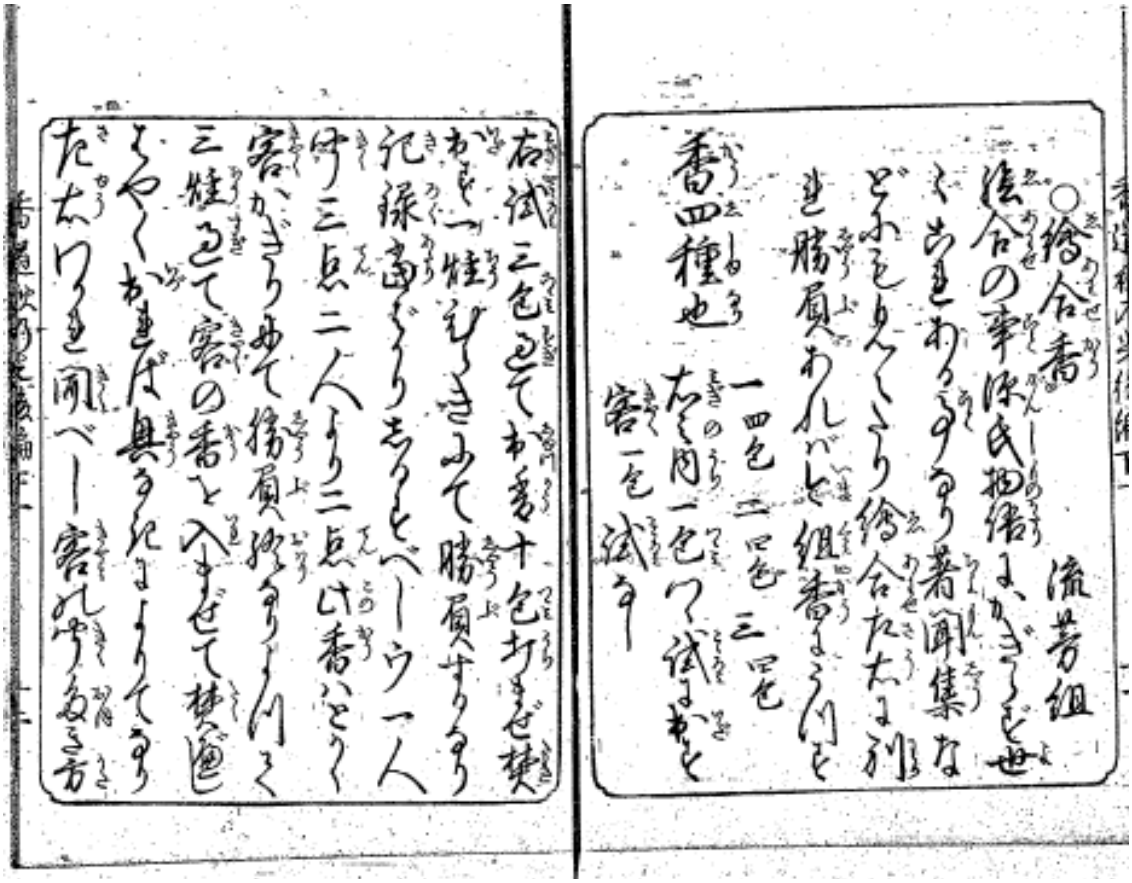
こむようにつくるべし。札の紋を絵に
書くべし。外に黄地紙黒ほねの
おうぎ一本、「楽府」かくべし。（楽府とは古き唐詩の中に楽府
の詩あり。此の類何にてもかくべし。）上巻の図を見合せ
つくるべし。盤は「源平香」の盤を用ゆべし。

札の紋

表「紫扇」四枚　「白扇」四枚　「大扇」三枚　以上、十
一枚一人分なり。裏は十炷香の札の紋に同じ。



［扇合香之記］



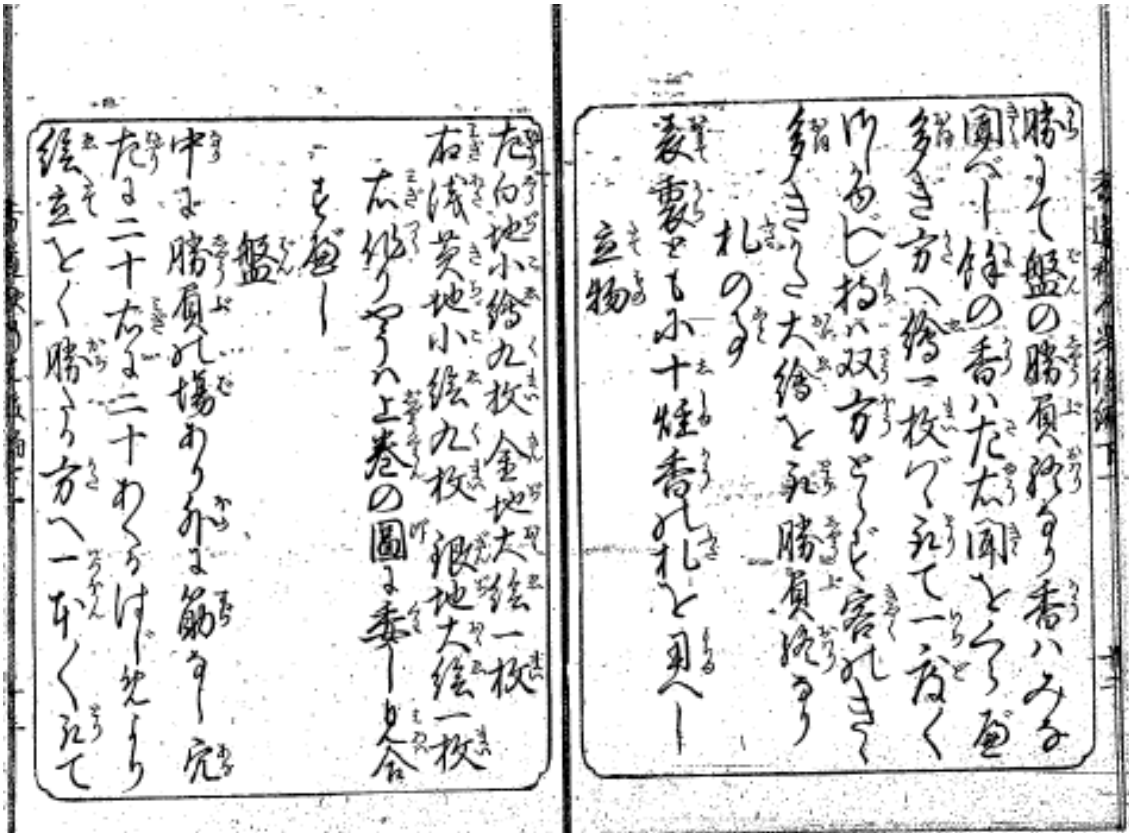
○絵合香（えあわせこう）　流芳組

絵合の事、『源氏物語』にかぎらず、世々これある事なり。『著聞集』などにも見えたり。「絵合」左右に別れ勝負あれば今組香にうつす。

香四種也

「一」四包　「二」四包　「三」四包
右の内一包ずつ試みに出す。
「客」一包　試みなし。

右試み三包過ぎて、出香十包打ちまぜ焚き出す。一炷ひらきにて勝負するなり。記録、当りばかりしるすべし。ウ一人聞三点、二人より二点、此の香はとかく客かぎりにて勝負終りなり。よって、三炷過ぎて客の香を入れまぜて焚くべし。はやく出ずれば、興なきによりてなり。左右わかれ聞くべし。客の聞き多き方



「勝」にて「盤の勝負」終りなり。香はみな聞くべし。餘の香は、左右聞きをくらべ、多き方へ「絵」一枚ずつ取りて一度一度さしかゆべし。「持」は双方とらず、客のきき多きかた、「大絵」を取り勝負終りなり。

札の紋

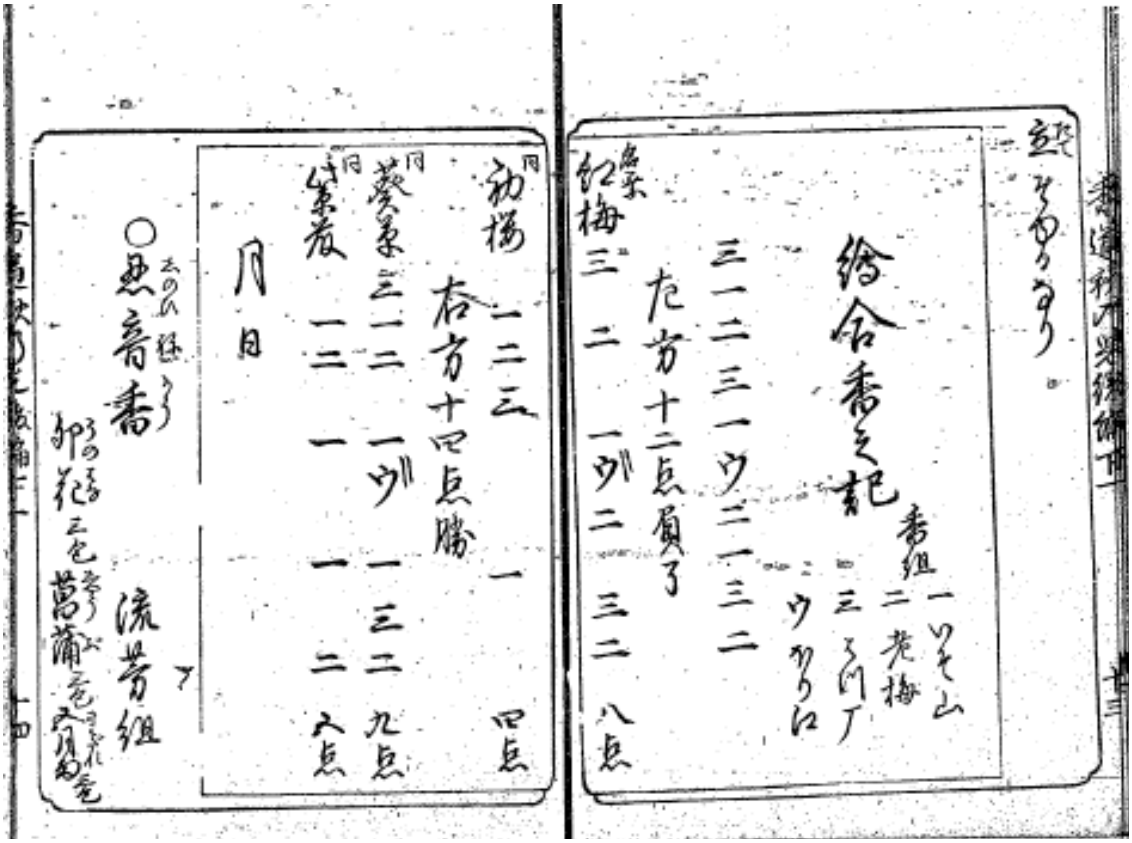
表裏ともに十炷香の札を用ゆべし。

立物

左「白地小絵」九枚　「金地大絵」一枚
右「浅黄地小絵」九枚　「銀地大絵」一枚
右作りようは、上巻の図に委し。見合すべし。

盤

中に「勝負の場」あり、外(ほか)に筋なし。穴左に二十、右に二十あくる。はじめより「絵」立ておく。勝ちたる方へ一本一本取りて

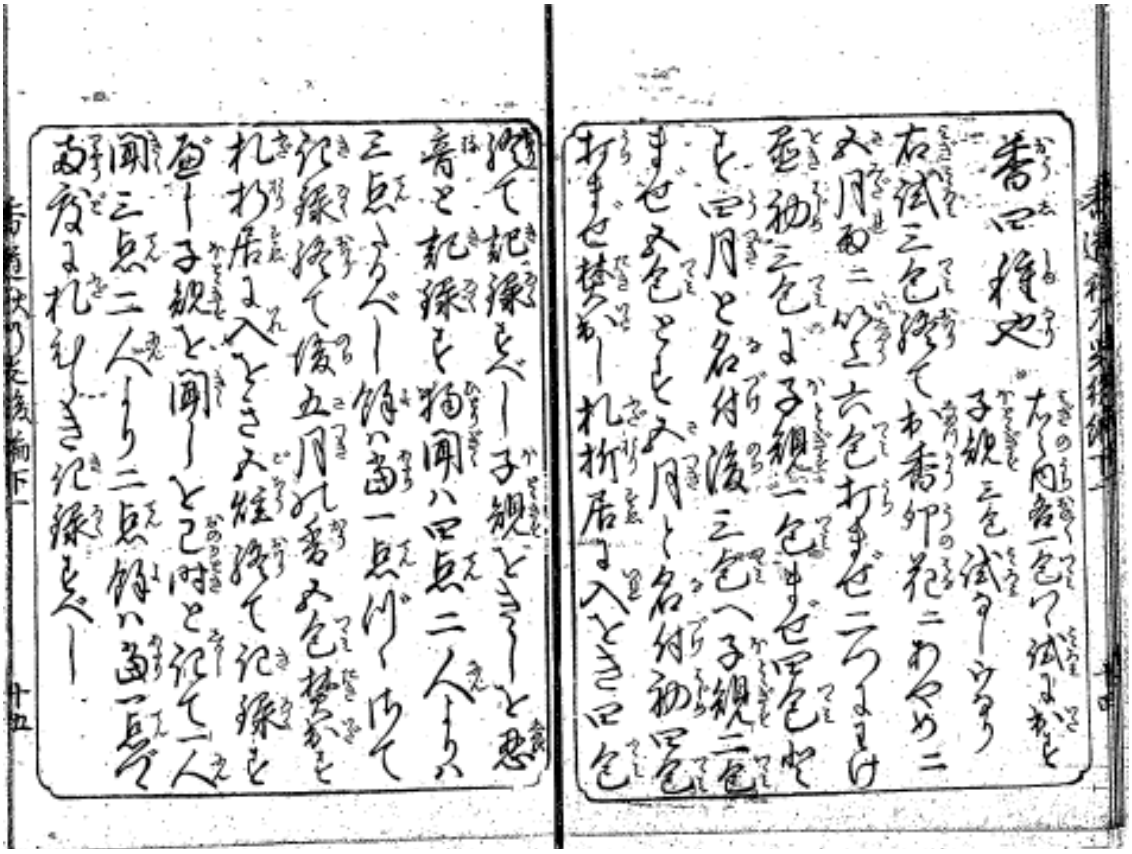


立てそゆる(添)なり。

[絵合香之記]

○忍音香(しのびねこう)　流芳組

[卯花]三包　[菖蒲]三包　[五月雨]三包

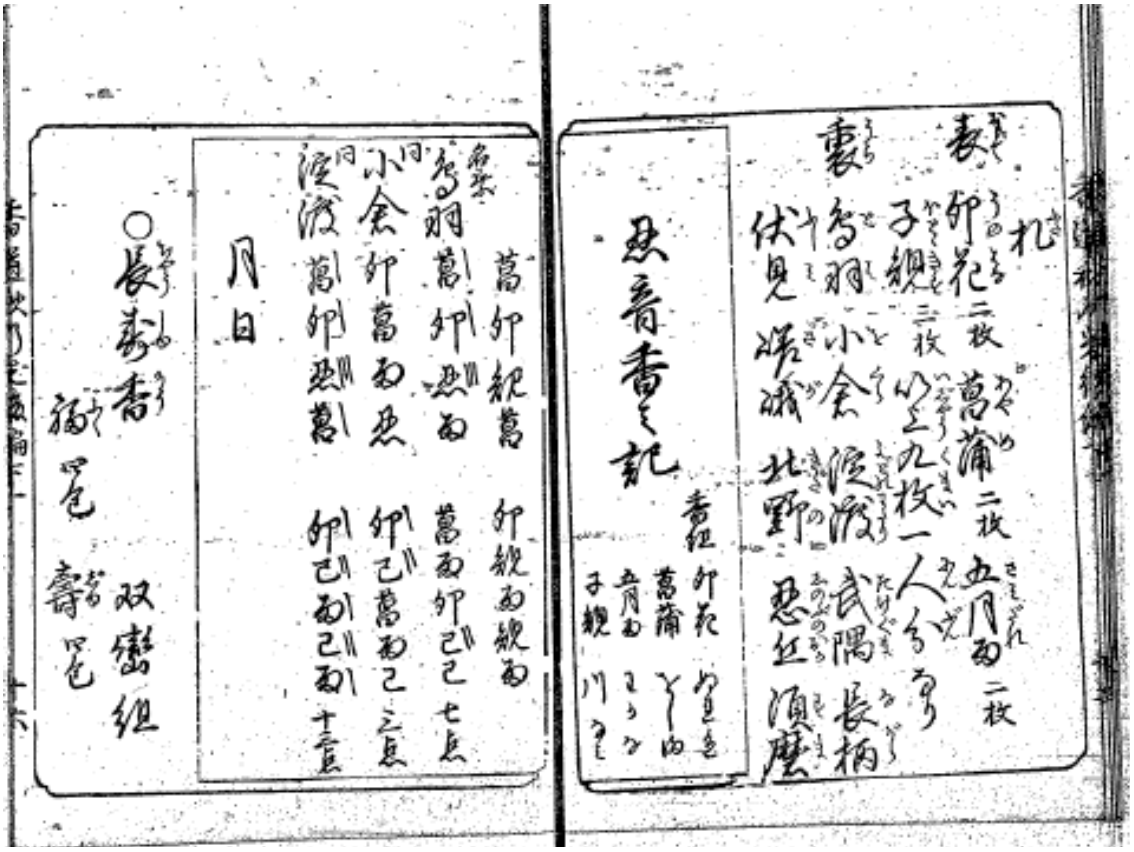


香四種也

右の内各々一包ずつ試みに出す

「子規（ほととぎす）」三包　試みなし。ウなり。

右試み三包終りて、出香「卯花」二、「あやめ（菖蒲）」二、「五月雨」二、以上六包打ちまぜ二つにわけ置き、初め三包に「子規」一包まぜ四包とす。「四月（うづき）」と名付け、後三包へ「子規」二包まぜ五包とす。「五月（さつき）」と名付け、初め四包打ちまぜ焚き出し、札、折居に入れおき、四包終りて記録すべし。「子規」をききしを「忍音」と記録す。独聞は四点、二人よりは三点たるべし。餘は当り一点ずつ。さて、記録終りて後、「五月」の香五包焚き出す。札、折居に入れおき、五炷終りて記録すべし。「子規」を聞きしを「己時（おのがとき）」と記して一人聞三点、二人より二点、餘は当り一点ずつ、両度に札ひらき記録すべし。



札

表「卯花」二枚　「菖蒲」二枚　「五月雨」二枚

「子規」三枚　以上九枚一人分なり。

裏「鳥羽」「小倉」「淀渡（よどのわたり）」「武隈（たけぐま）」

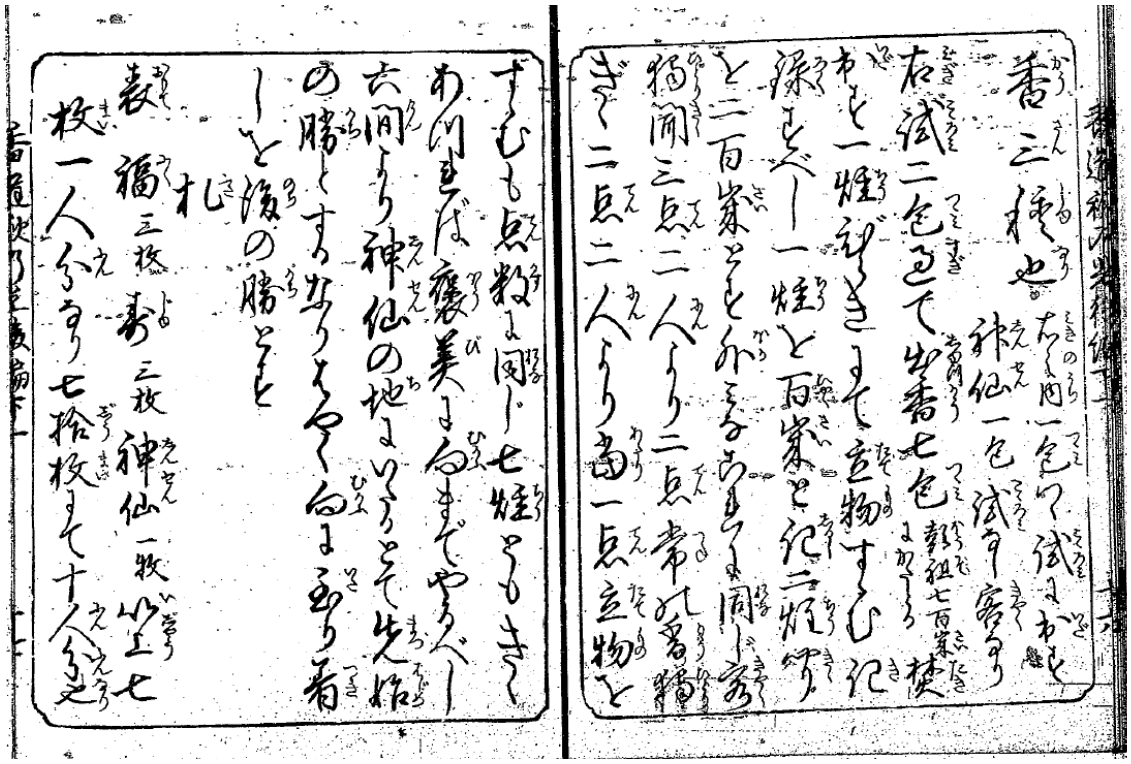
「長柄（ながら）」「伏見」「嵯峨」「北野」

「忍丘（しのぶのおか）」「須磨」

［忍音香之記］

○長寿香（ちょうじゅこう）　双巒組

「福」四包　「壽」四包



香三種也

右の内一包ずつ試みに出す。

「神仙」一包 試みなし。客なり。

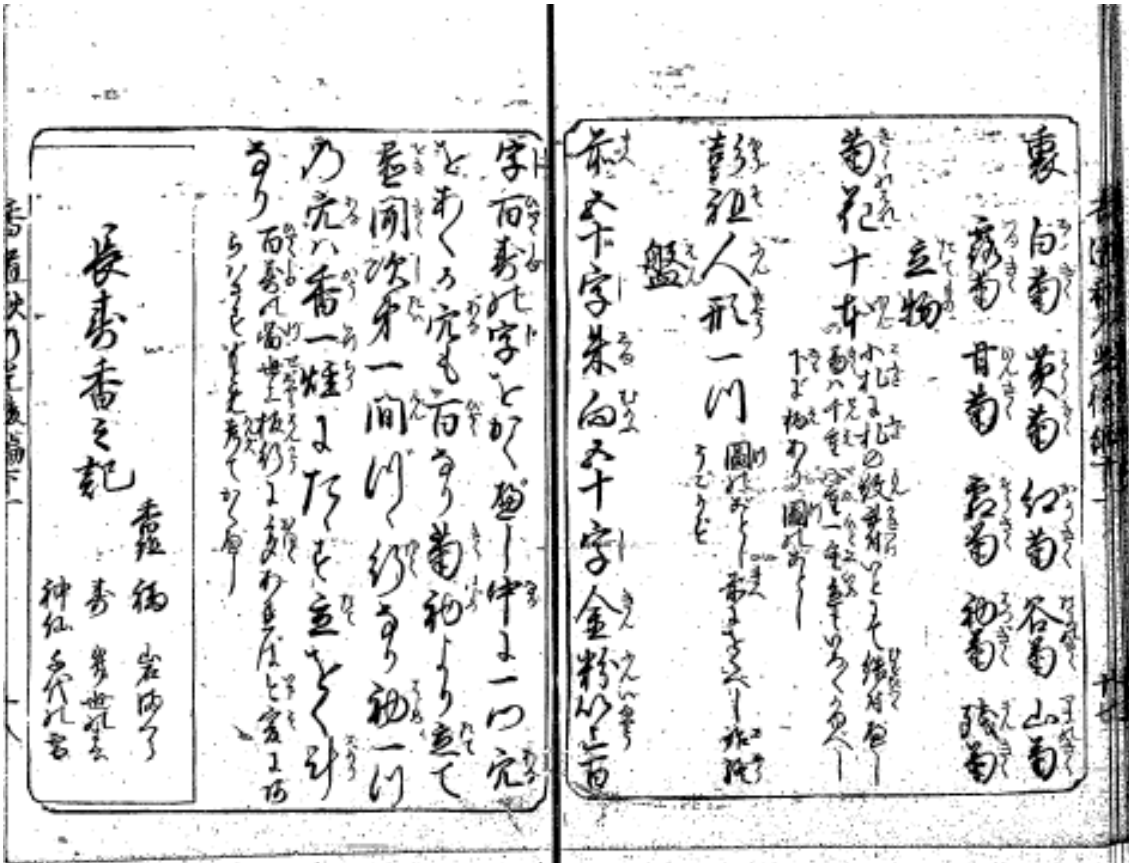
右試み二包過ぎて、出香七包（「彭祖」、七百歳にかたどる）焚き出す。一炷びらきにて立物すすむ。記録すべし。一炷を「百歳」と記し、二炷聞きを「二百歳」とす。外みなこれに同じ。客、独聞き三点、二人より二点。常の香、独ぎき二点、二人より当り一点。立物をすすむも点数に同じ。七炷ともきき

あつれば、褒美に向うまでやるべし。

六間より「神仙の地にいたる」とて先ず始めの「勝」とするなり。はやく向うに至り着きしを後の勝ちとす。

札

表「福」三枚 「寿」三枚 「神仙」一枚 以上七枚一人分なり。七拾枚にて十人分なり。



裏「白菊」「黄菊(おうぎく)」「紅菊(こうぎく)」
「谷菊」「山菊」「露菊」「甘菊(かんぎく)」「霜菊(そうぎく)」
「初菊」「残菊」

立物

菊花　十本　小札に札の紋書き付けいと(糸)にて、結び付くべし。
菊は、千重、八重、一重、色もいろいろかゆべし。
下に柄あり。図のごとし。

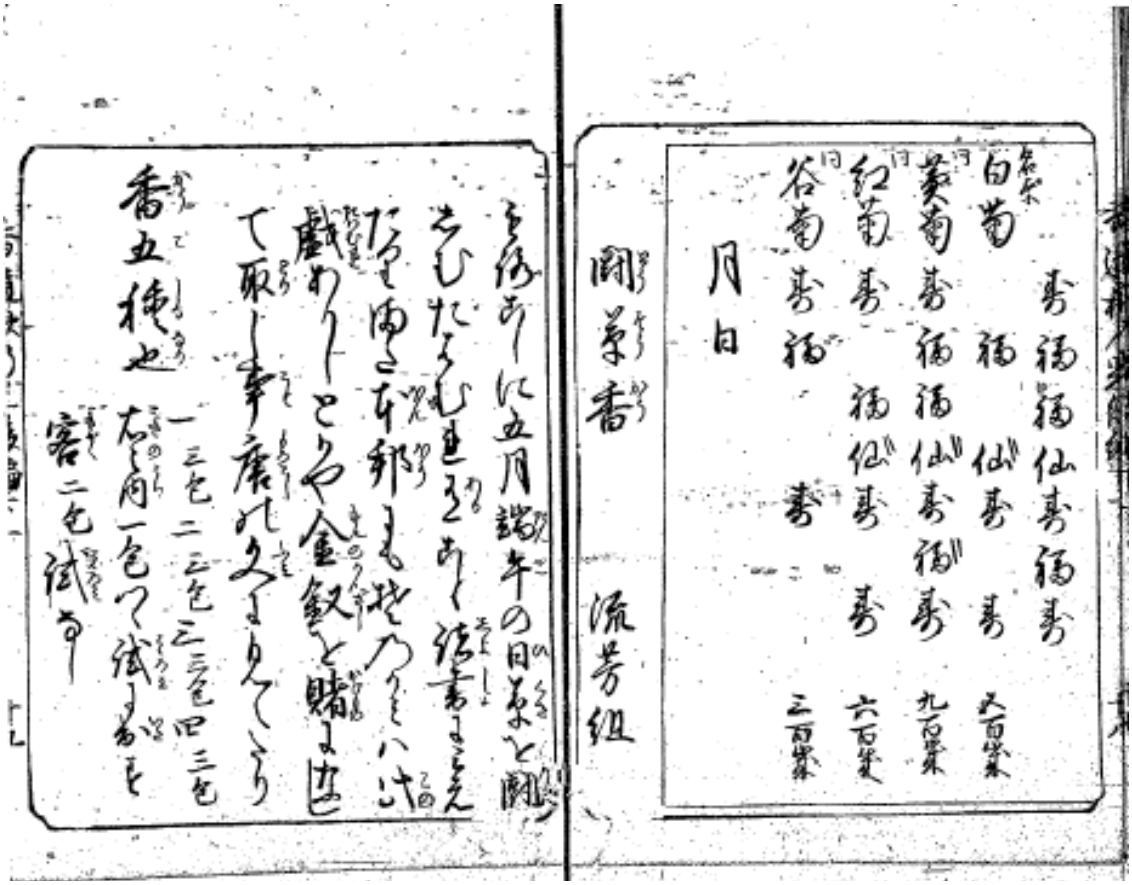
報祖人形　一つ　図のごとし。前におくべし。始終うごかず。

盤

前、五十字朱、向う、五十字金粉、以上百

字、「百寿」の字をかくべし。中に一つ穴
をあくる。穴も百なり。菊、初めより立て
置き、聞き次第一間ずつ行くなり。初め一つ
の穴は、香一炷にたたず、立て置くばかり
なり。(「百寿の図」、世上板行に多くあれば、今ここにあ
らわさず。もとめ考えて書くべし。)

[長寿香之記]



○鬪草香（とうそうこう）　流芳組

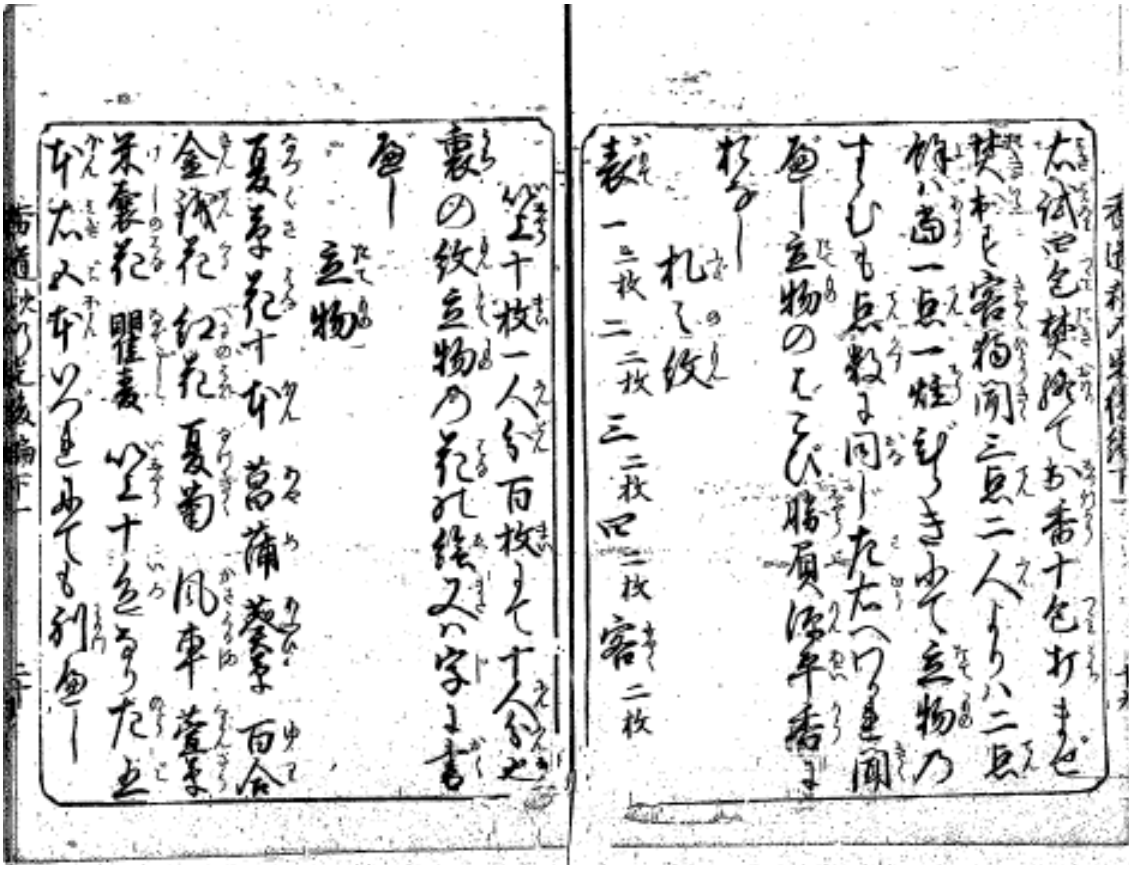
もろこしに五月端午の日、草を鬪わしむたわむれ有ること、諸書にみえたり。また、本邦にもそのかみは此の戯れありしとかや。金の釵（かんざし）を賭になして取りし事、唐の文に見えたり。

香五種也

「一」三包　「二」三包　「三」三包　「四」三包

右の内一包ずつ試みに出す。

「客」二包　試みなし。



右試み四包焚き終りて、出香十包打ちまぜ
焚き出す。「客」独聞三点、二人よりは二点、
餘は当り一点。一炷びらきにて立物の
すすむも点数に同じ。左右へわかれ聞く
べし。立物のはこび、勝負、「源平香」に
おなじ。

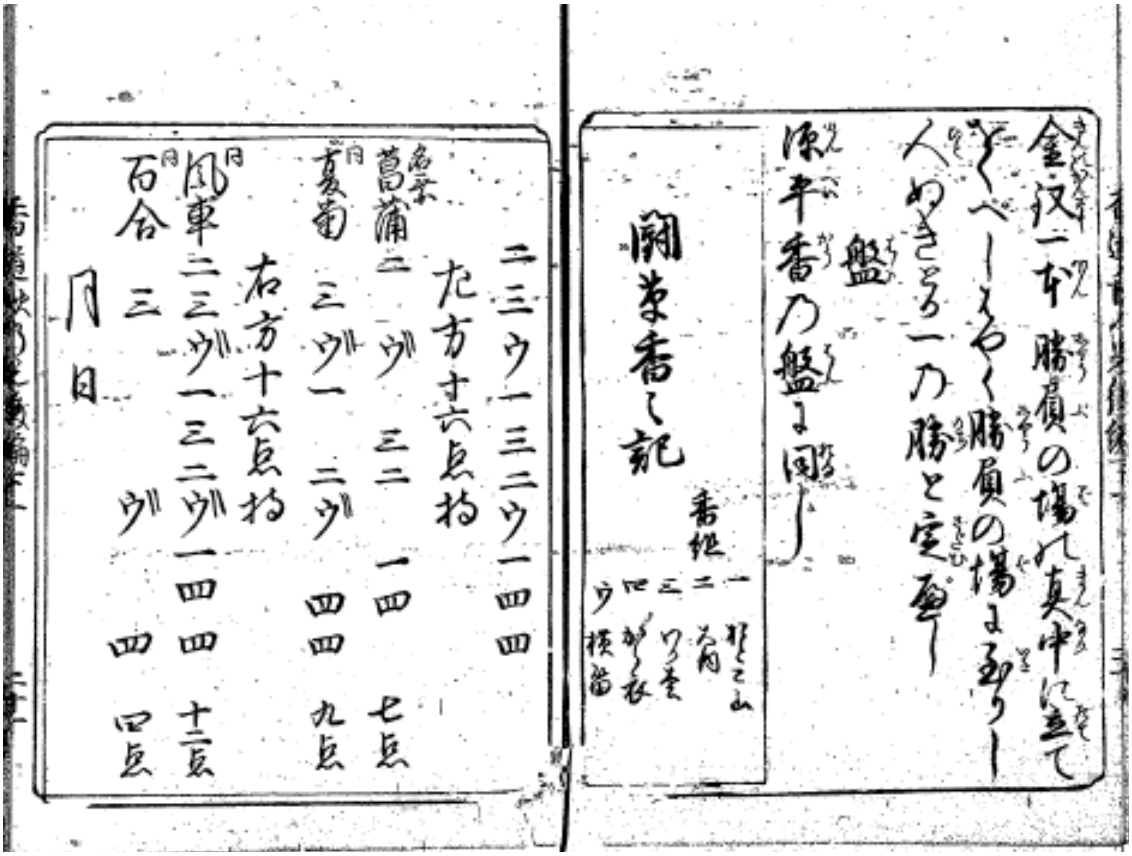
札の紋

表「一」二枚　「二」二枚　「三」二枚　「四」二枚
「客」二枚

以上十枚一人分、百枚にて十人分なり。
裏の紋、立物の花の絵、または字に書く
べし。

立物

夏草花　十本　「菖蒲(あやめ)」「葵草」「百合」
「金銭花(きんせんか)」「紅花(べにのはな)」「夏菊」「風車」
「萱草(かんぞう)」「米嚢花(けしのはな)」「瞿麦(なでしこ)」
以上十色なり。左五
本、右五本いずれにても別つべし。

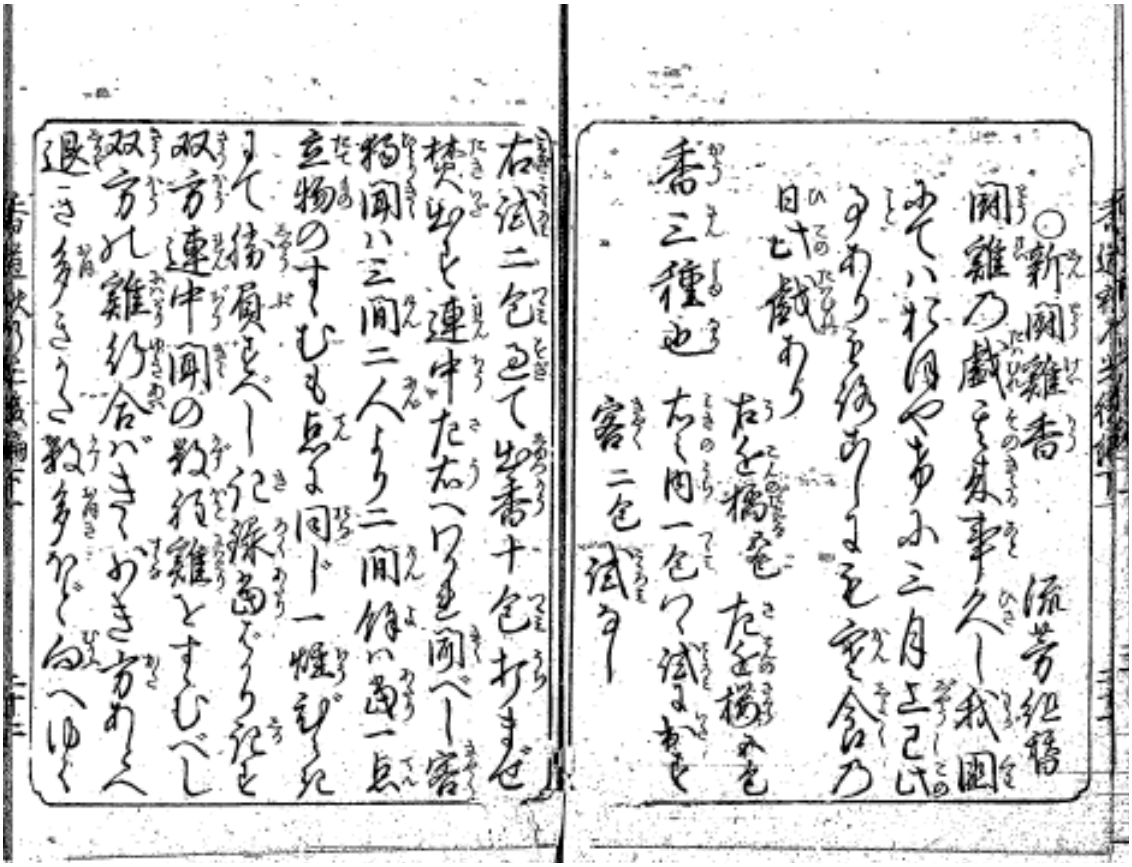


「金叙」一本「勝負の場」の真中に立て
おくべし。はやく勝負の場に至りし
人ぬきとる。「一の勝ち」と定むべし。

盤

「源平香」の盤に同じ。

［闘草香之記］



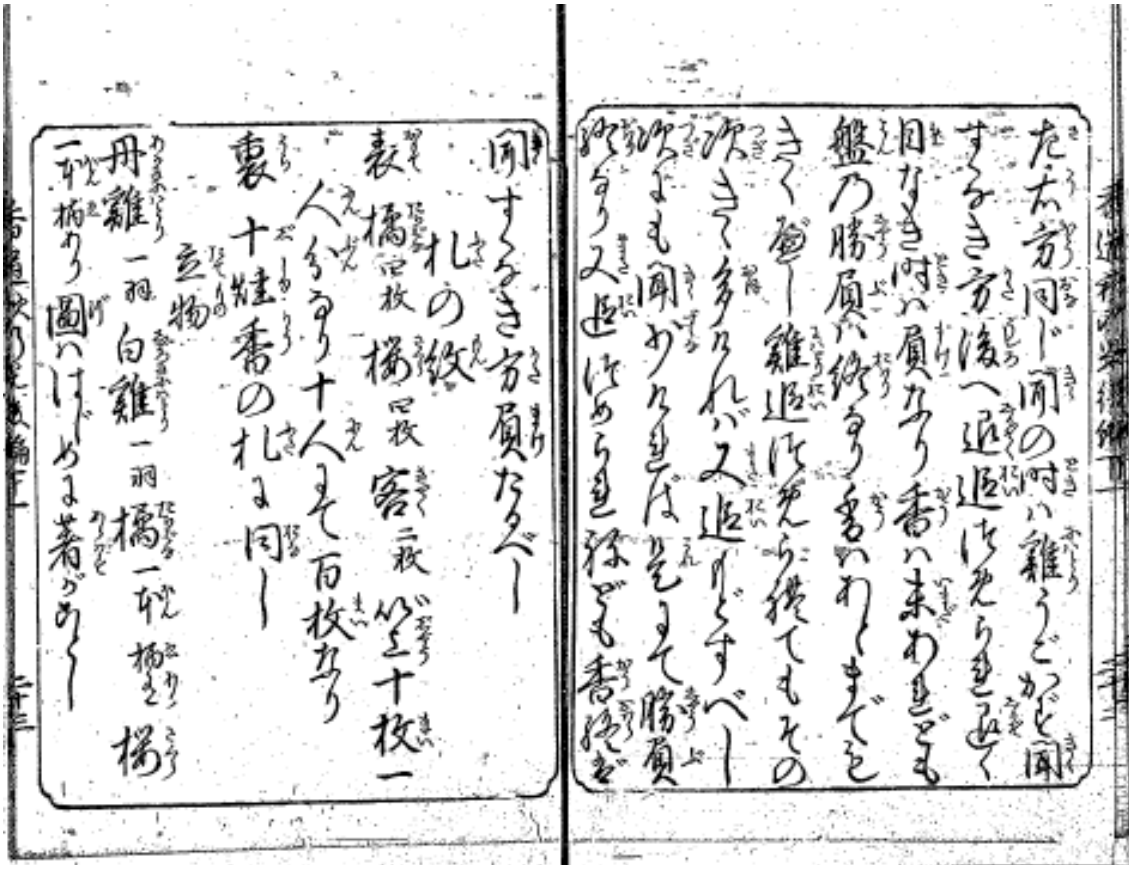
○新闘鶏香（しんとうけいこう）　流芳組

闘鶏の戯れその来たる事久し。我が国にては、おおやけに三月上己（じょうし＝上巳）、此の事あり。もろこしにも寒食（かんしょく）の日、此の戯れあり。

香三種也

「右近橘」五包　「左近桜」五包
右の内一包ずつ試みに出す。
「客」二包　試みなし。

右試み二包過ぎて、出香十包打ちまぜ焚き出す。連中、左右へわかれ聞くべし。「客」独聞は三間、二人より二間、餘は当り一点。立物のすすむも点に同じ。一炷びらきにて勝負すべし。記録、当りばかり記す。双方、連中聞きの数程、「鶏」をすすむべし。双方の「鶏」、行合わば、きき少なき方あとへ退き、多きかた、数多きほど向うへゆく。



左右方同じ聞きの時は、「鶏」うごかず、聞きすくなき方、後ろへ退く。追いつめられ退く目なき時は「負」なり。香は未だあれども「盤の勝負」は終りなり。香は、あとまでもきくべし。「鶏」追いつめられても、その次きき多ければ、また追いもどすべし。次にも聞き少なければ、是にて勝負終りなり。また、追いつめられねども香終わらば、聞きすくなき方「負」たるべし。

札の紋

表「橘」四枚　「桜」四枚　「客」二枚　以上十枚一人分なり。十人にて百枚なり。

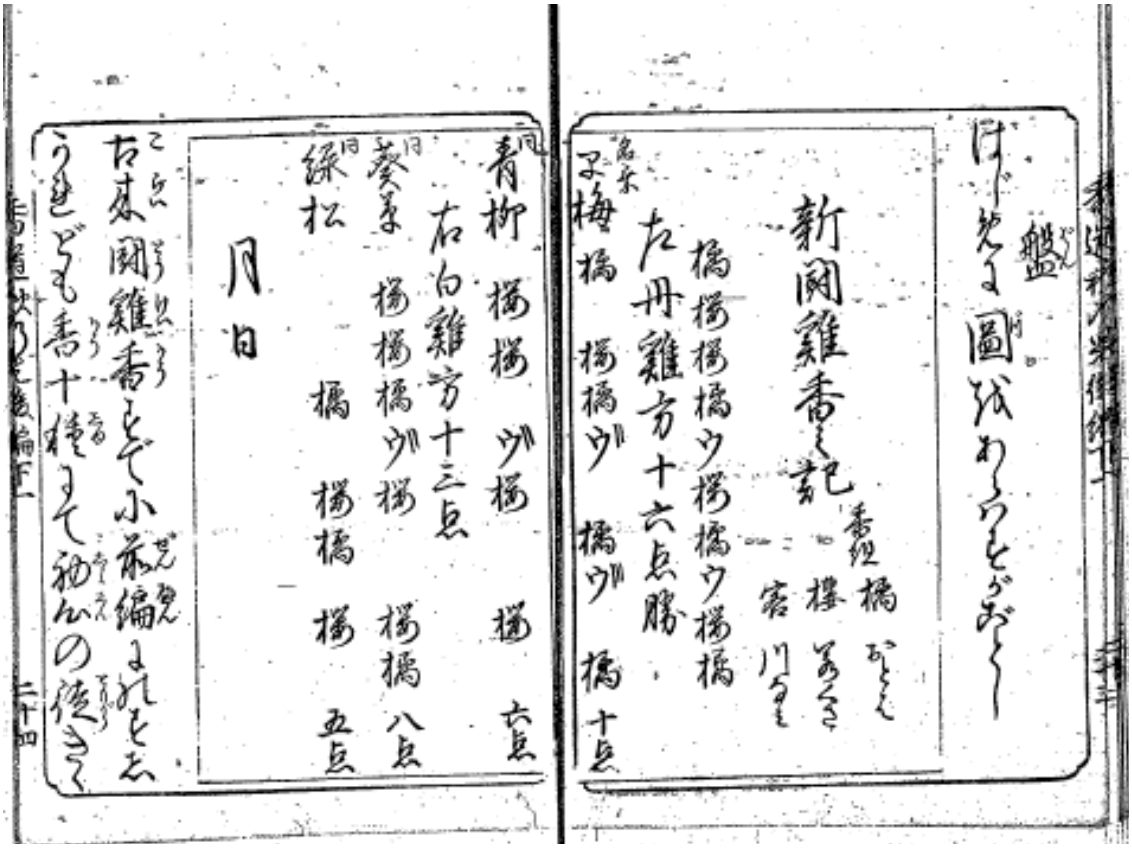
裏「十炷香」の札に同じ

立物

「丹鶏（あかきにわとり）」一羽　「白鶏（しろきにわとり）」一羽

「橘」一本（柄あり）　「桜」一本（柄あり）

図ははじめに著すがごとし。

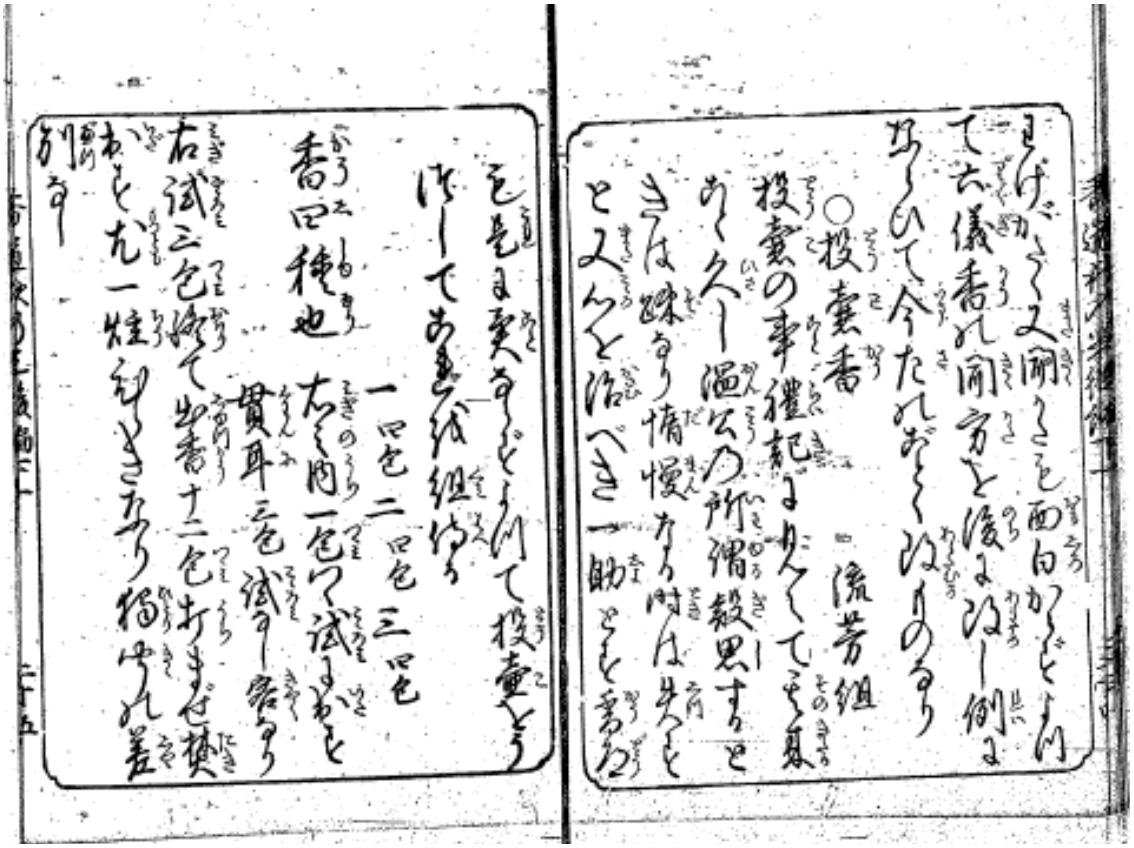


盤

はじめに図をあらわすがごとし。

［新闘鶏香之記］

古来、「闘鶏香」すでに前編にのす(載)。しかれども、香十種にて初心の徒(ともがら)きき



わけがたく、また聞きかたも面白からず。よって「六儀香」の聞き方を後に改めし例にならいて、今、左のごとく改むるものなり。

○投壷香（とうここう）　流芳組

投壷の事、『禮記（らいき）』に見えて、その来ること久し。「温公」の所謂「疑思（ぎし）すると きは疎なり。惰漫（だまん）なる時は失す。」と、また、心を治むべき一助とす。香道も、是に異ならず。よって投壷をうつして、これを組み侍る。

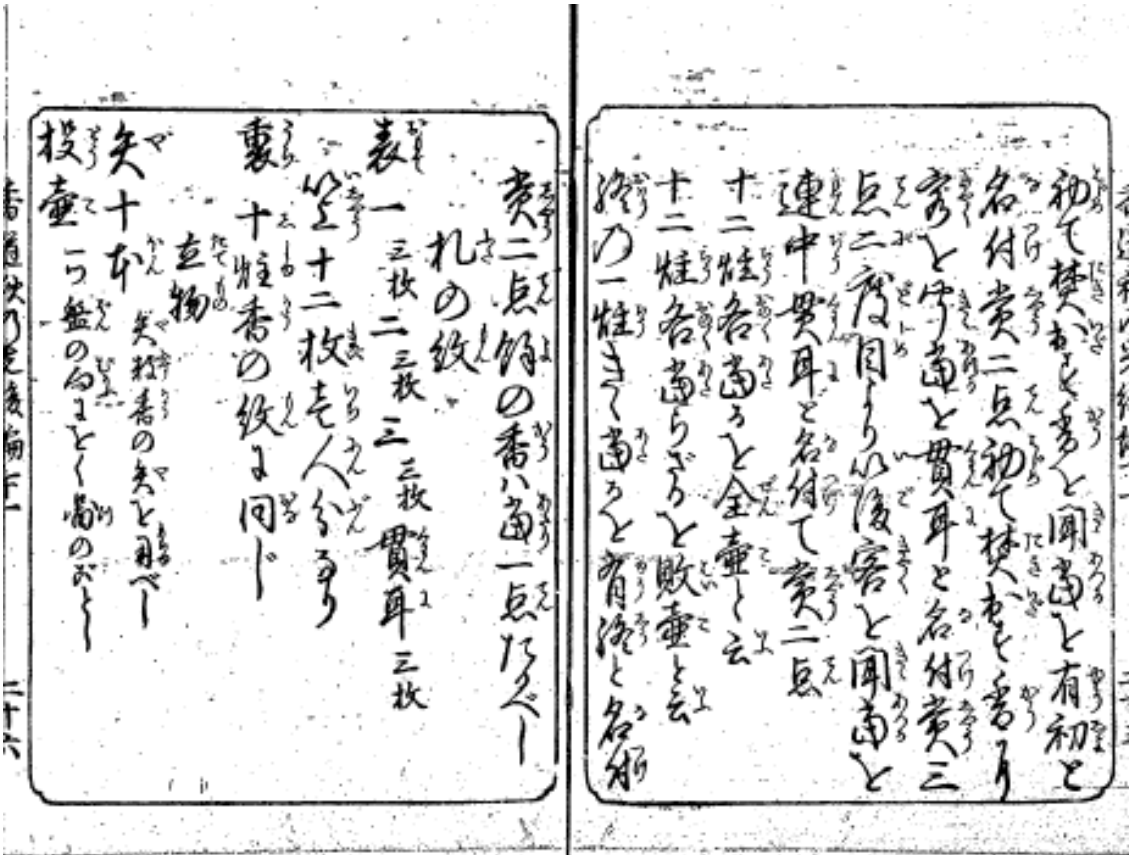
香四種也

「一」四包　「二」四包　「三」四包

右の内一包ずつ試みに出す。

「貫耳（かんに）」三包　試みなし。客なり。

右試み三包終りて、出香十二包打ちまぜ焚き出す。尤も一炷ひらきなり。独聞の差別なし。



初めて焚き出す香を聞き当つるを「有初(ゆうしょ)」と名付け、賞二点。初めて焚き出す香に「客」を聞き当つるを「貫耳」と名付け、賞三点。二度目より以後、「客」を聞き当つるを「連中貫耳」と名付けて賞二点。

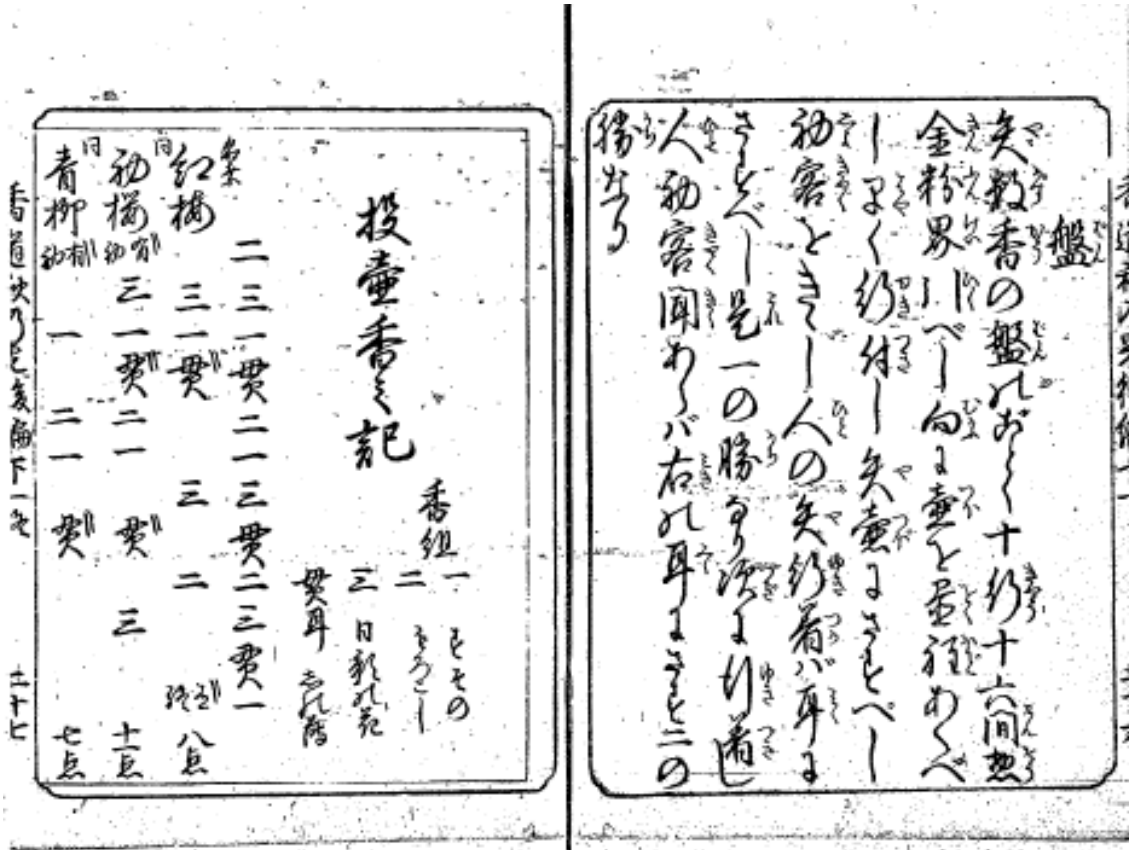
十二炷各々当るを「全壷(ぜんこ)」と云う。
十二炷各々当らざるを「敗壷(はいこ)」と云う。
終りの一炷きき当るを「有終(ゆうしゅう)」と名付け賞二点。餘の香は当たり一点たるべし。

札の紋

表「一」三枚　「二」三枚　「三」三枚　「貫耳」三枚
以上十二枚壱人分なり。
裏　十炷香の紋に同じ。

立物

「矢」十本　矢数香の矢を用ゆべし。
「投壷」一つ　盤の向うに置く。図のごとし。

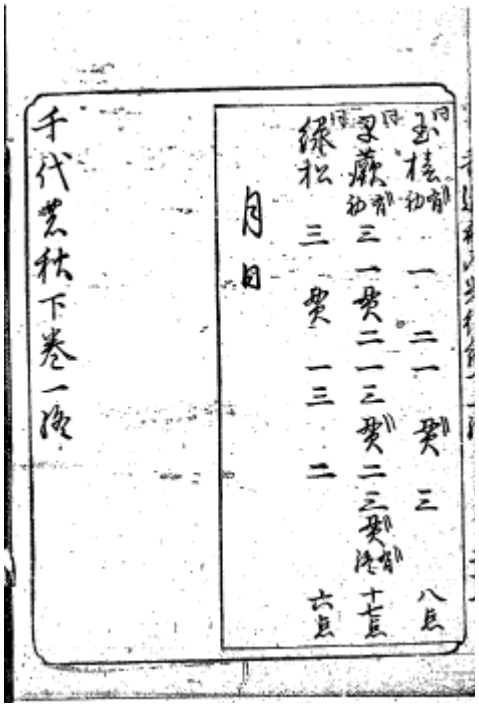


盤

「矢数香」の盤のごとく、十行十六間、惣金粉界引くべし。向うに「壷」を置く程あく(開く)べし。早く行き付きし「矢」、「壷」にさすべし。初客をききし人の「矢」、行き着かば「耳」にさすべし。是、「一の勝」なり。次に行き着きし人、初客聞きあらば、右の「耳」にさす。「二の勝」なり。

[投壷香之記]

【投壷】中国から伝わった遊戯の一つ。奈良時代日本に伝来。後世、江戸時代、天明・寛政の頃に流行したものは、壺をはさんで等距離に向かいあい、その地点から矢を投じて壺へのはいり方や数で点数を争って遊んだ。つぼうち。つぼなげ。



千代農秋下巻一終り

【凡例】

① 句読点、「」、送り仮名等は適宜追記しました。

② 旧仮名使いを新仮名使いに適宜改めました。

③ 黒字の（）は、本文内に小文字で記された注記です。

④ 青字の（）は、筆者の補足です。

⑤ 赤字は、判読等に曖昧な点がある部分です。

令和二年三月

『香筵雅遊』國井和裕